

の特性があるので、併用し、より効果を発揮するように配慮してほしいものである。

OHPを単なる板書や図表の提示のかわりに使うだけでなく、OHPでなければできないような教材提示の場面に、大いに活用を図るようにしてほしい。

次に、OHP・TPの機能と特性を生かした活用例を二例あげてみる。

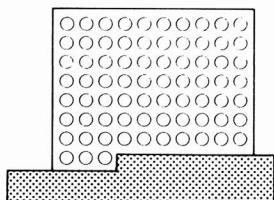
〔1〕かずの数え方の練習に使うTP

100 までのかずを数える学習では、黒板にたくさんの丸を書いたり、たくさんの磁石を並べたりしなければならないので、問題提示までに不必要な時間を消費してしまう。さらに、次の問題の提示の時に、丸を書いたり消したり、磁石をとったり並べたりしなければならない。このような時、次のようなTPを使うとよい。丸を100個書いてあるTPの一部を、図のようなマスク（不透明な紙）で隠すことによっ

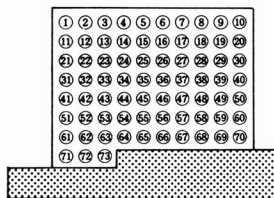
ていかなる数でも、瞬時につくりだすことができるのである。学習者がかずを数えたあとに、1～100までの数を書いたTPを重ねると、かずの数え方が正しいかどうか、学習者にフィードバックさせることもできる。

このように、1つのTPで、何回でも、何種類の問題でも自由につくりだせ、提示できるTPこそ、「TPらしいTP」といえる。

TP①
+
マスク



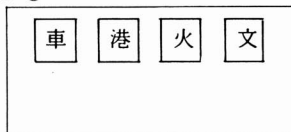
TP①
+
マスク
+
TP②



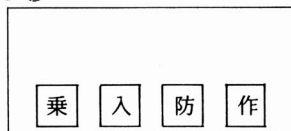
〔2〕漢字の熟語の成り立ちを理解させ、漢字への興味を持たせるために、熟語成立の型をTPの合成、分解、平行移動などの方法で示したTP

動詞と名詞（客語）からなる文を3つに分解し、TP①～③のように3枚のシートに書き分ける。TP①とTP②には同色のカラーシートを貼る。TP①～③を合成すると、図1になる。この4つの文を読ませ、その文からどんな熟語ができるかを考えさせる。続いてTP③をはずし、TP①を下にずらして、TP①と②のカラーシートが重なるようにすると、図2のような熟語ができる。できた熟語を続ませ、どのように熟語になったか話し合い、送りがなや「を」・「に」などの助詞がとれて、漢字の位置が逆転して結び合っていることを理解させる。同様に、

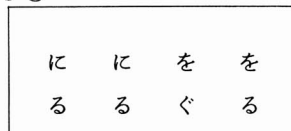
TP①



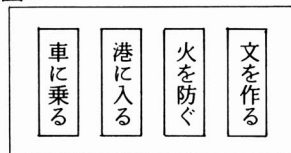
TP②



TP③



< 図1 >



< 図2 >



などの修飾語を伴ったシートを作って、「青空」のように、位置がそのまま結びあっていることを理解させることもできる。

5. おわりに

「OHPの見直しと再活用のすすめ」について述べてきたが、OHPだけでなく、それぞれの機器には、その機器だけがもつ特性がある。それぞれの機器の良さを熟知して、学習目標を達成するために、教授・学習過程に適切に位置づけて、活用を図っていくことが必要である。そのためにも、教科の本質及び目標、単元や題材の目標・内容についての教材研究を深めていかなければならない。

〔参考資料〕

「OHPを生かす新技法」岸本唯博・森正康著 学研